

知っておきたい 十味敗毒湯の基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生 熊本赤十字病院 総合内科 部長

出典 瘍科方箋 癰疽門

十味敗毒湯の出典は、『瘍科方箋』(華岡青洲・19世紀初頭)であり、化膿性疾患を取り扱った「癰疽門」に収載されている。

構成生薬は、防風・荊芥・独活・柴胡・川芎・桔梗・茯苓・桜皮・生姜・甘草である。

効能・効果

化膿性皮膚疾患・急性皮膚疾患の初期、じんましん、急性湿疹、水虫

古典に見る十味敗毒湯

十味敗毒湯の変遷－荊防敗毒散

十味敗毒湯は『瘍科方箋』において「皮膚の化膿性病変および様々な膿を形成する丘疹の初期で、悪寒と高熱があり、焼けるように腫れて痛む場合を治療する」と記されている。

十味敗毒湯の起源となる処方¹⁾が、『万病回春』(龔廷賢・1587年)巻八 癰疽門に収載されている「荊防敗毒散」であり、組成は、防風・荊芥・羌活・独活・柴胡・前胡・川芎・桔梗・枳殼・茯苓・薄荷・連翹・金銀花・甘草である。

荊防敗毒散は「万病回春」において「皮膚の化膿性病変で腫脹し、背部の発疹、乳腺炎などの疾病で、悪寒と高熱、重症では頭痛と全身のこわばりを伴って症状は季節性の流行性感染症に類似する。1・2日目から4・5日目では、1～2処方分で、その病毒を発散させる。軽症では体内で自然と消滅する」と記されている。

十味敗毒湯と荊防敗毒散はいずれも「解表薬」(勝湿(燥湿)薬)「滲湿薬」が組み合わされた、「体表の風湿」を除く基本組成からなっている。

漢方において化膿性病変は、「熱(毒)」と「湿」が停滞している病態と考え、治療は「清熱解毒」と「滲湿」を行い、特に体表面であれば、気を発散させて湿を取り除くために「解表薬」と「勝湿(燥湿)薬」を加える。

十味敗毒湯の変遷－人參敗毒散

荊防敗毒散の起源となる処方²⁾が、『和剂局方』(陳師文ら・1110年頃)巻之二 傷寒の第一処方として収載されている「人參敗毒散」であり、「季節性の流行性感染症や季節を超えた流行性感染症で、頭痛や後頸部がこわばり、高熱と悪寒、体が煩わしく疼く場合を治療する。および寒気がかぶさりせき込み、鼻づまりと声がぐもり、風痰による頭痛が生じ、吐き気やえづきがあり、寒気と熱感がある場合も合わせて全て治療する」と記されている。

組成は、人參・羌活・独活・柴胡・前胡・川芎・桔梗・枳殼・茯苓・薄荷・生姜・甘草である。

十味敗毒湯の変遷－構成生薬

急性の流行性感染症に用いる人參敗毒散が、『万病回春』では皮膚化膿性疾患の治療薬である荊防敗毒散に改変され、さらに『瘍科方箋』で十味敗毒湯に改良された(図1)。

①柴胡・前胡

『本草経集注』(陶弘景・500年頃)巻三 草木中品 前胡では、前胡と柴胡は類似した生薬として、柴胡の代替品として組み入れられたのが前胡であると解説されている。前胡は呼吸器症状に用いる生薬のため、皮膚病変に用いるために十味敗毒湯では柴胡に集約された。

図1 十味敗毒湯の変遷

人參敗毒散	荊防敗毒散	十味敗毒湯
《補氣生津》 人參	防風	防風
	荊芥	荊芥
羌活	羌活	羌活
獨活	獨活	
柴胡	柴胡	柴胡
前胡	前胡	
川芎	川芎	川芎
桔梗	桔梗	桔梗
枳殼	枳殼	
茯苓	茯苓	茯苓
薄荷	薄荷	桜皮
	連翹	
《理氣行水》 生姜	金銀花	生姜
甘草	甘草	甘草

②羌活・独活

『本草綱目』(李時珍・1578年)草之二 独活では、ほとんど同じものとして解説されている。そこで華岡青洲は羌活と独活を羌活にまとめ、現代のエキス製剤では独活が採用されている。

③枳殻・生姜・人參

枳殻：膿瘍の自壊排膿を促す効果を有するため、膿瘍が形成される前段階で用いられる十味敗毒湯からは除かれた。

生姜：荊防敗毒散では除かれたが、胃気を鼓舞して気の発散を助け、成膿を促すことを目標に、十味敗毒湯では配合された。

人參：補気生津の人參は、化膿性病変では熱を強め、滲出機転が増す可能性があるため荊防敗毒散、十味敗毒湯から除かれた。

④桜皮・樸櫨

『勿誤藥室方函口訣』(浅田宗伯・1878年)に、化膿性病変や化膿傾向のある丘疹性病変の初期において悪寒や高熱のとき、また痛みが強いものを治療するものとして、桜皮を樸櫨に代えた十味敗毒湯が紹介されている。

桜皮は民間で多用された生薬で、食中毒の解毒薬や鎮咳薬、蕁麻疹などの発疹に応用されることが知られている。滲出機転を除き清熱解毒の効果を有することに加え、抗アレルギー効果を期待できるような生薬である。

樸櫨について『一本堂薬選』(香川修庵・1734年)では、「瘀血や梅毒の皮疹が組織を破壊しているもの、様々な悪性の発疹性病変が組織を破壊しているもの、打撲により瘀血が長年停滞しているものを除く」と記されている。瘀血は痛みを伴うことが知られており、血行を改善することで疼痛を除くことに注目した生薬であると考えられる。

すなわち、樸櫨配合の十味敗毒湯は痛みに注目した処方であり、桜皮配合の十味敗毒湯はアレルギー性病変や熱性病変、化膿に対する効果を期待した処方と考えることができる。

十味敗毒湯の方剤解説

十味敗毒湯は、「風湿」が皮膚の比較的表層にとどまっている病態に用いる処方である。効能は勝湿解表、解毒、排膿、主治は風湿表証、瘡瘍未膿、止痒である(図2)。

十味敗毒湯は現代医学的にはアトピー性皮膚炎の急性

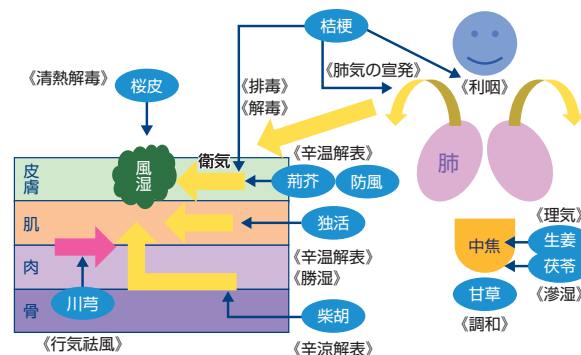
増悪期や尋常性痤瘡など湿疹性病変の初期段階の紅斑・丘疹・小水疱、さらに若干の化膿機転や滲出機転が生じている段階で用いることが臨床応用のポイントである。

図2 十味敗毒湯の方剤解説

【効能】勝湿解表 解毒 排膿

【主治】風湿表証、瘡瘍未膿、止痒

【症状】悪寒、重怠く、鈍い痛み、軽度悪心、脈浮滑、舌白苔～やや黄色、瘡瘍(皮膚化膿性疾患)で成膿する前からやや成膿の段階、皮膚の軽度の発赤と腫脹(主座は皮膚)



十味敗毒湯の類縁処方との鑑別 (図3:次頁参照)

● 清上防風湯

清上防風湯は、十味敗毒湯よりも熱の性質が強い病変が適応であり、特に上半身の熱毒を中心に、風湿が関与している化膿性が強い病変に用いる処方である。

● 黄連解毒湯

黄連解毒湯は、清熱解毒の効果がより強い処方であり、全層での血分の熱毒が中心の病態で、強い化膿性病変と暗赤色の発赤に用いる。特に皮膚の乾燥や組織の萎縮がある慢性的な炎症の場合は温清飲に変方する。

● 越婢加朮湯

越婢加朮湯は、より滲出機転が強い熱性病変に幅広く用いる処方である。蕁麻疹では急に発症するが濕熱に伴う刺激がはっきりと蕁麻疹を誘発する場合や真っ赤になる場合が適応であり、熱に伴って症状が悪化する、浮腫が強いことが使用のポイントである。

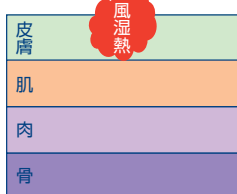
知っておきたい十味敗毒湯の基本と臨床のポイント

消風散

消風散は湿疹性病変に幅広く用いる処方だが、消風散を用いる際には病態に応じて他の処方との併用を考慮する必要がある。発赤・化膿が強ければ黄連解毒湯、急性増悪期であれば十味敗毒湯、滲出成分が強く病変が真っ赤であれば越婢加朮湯、皮膚の乾燥が強ければ四物湯や温清飲を併用する。消風散は夜間に増悪し発赤を伴う乾燥傾向の皮膚に出現する蕁麻疹にも用いるが、痒みが強ければ十味敗毒湯との併用が効果的である。

図3 類縁処方との鑑別

清上防風湯



熱毒＞風＞湿が皮膚・上半身に停滞
熱毒：化膿性病変、湿：滲出物、風：急性の病態

- 皮膚、特に上半身の熱毒を中心に、風・湿が関与している病態。
- つまり、特に上半身の真皮層（そのため、丘疹が多い）の急性化膿性病変。滲出物は多くない。

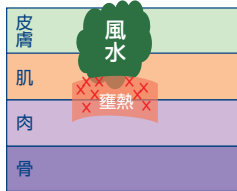
黄連解毒湯



熱毒＞湿の全層での血分の病態
血分の熱毒：化膿性病変で、暗い発赤、滲出物は軽度あり

- 全層での血分の熱毒が中心の病態。
- つまり、深さに関わらず、強い化膿性病変と暗赤色の発赤。
- 皮膚の乾燥や組織の萎縮があれば、温清飲を使用する。

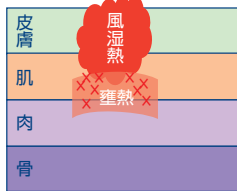
越婢加朮湯



水腫＞壅熱＞風が皮膚・筋肉に停滞
水腫：浮腫、壅熱：鬱滞した気の熱、風：突然発症、痒痒感

- 皮膚・肌の津液の停滞と圧迫され停滞した気の熱化に風邪も関与。
- つまり、浮腫（膨疹）と明い発赤、突然発症・消退、痒痒感あり。

消風散



風＞熱毒・壅熱＞湿＞陰虚が皮膚・肌に分布
風：痒み、突然発症・消失、熱毒：化膿、壅熱：鬱滞した気の熱、発赤は明い、陰虚：乾燥、組織の萎縮

- 湿疹病変に広く対応。発赤・化膿、滲出成分、皮膚乾燥をみて加減が必要。
- 夜間に増悪し発赤を伴い乾燥傾向の皮膚に出現する慢性蕁麻疹。

十味敗毒湯の基礎理論と皮膚病変への応用

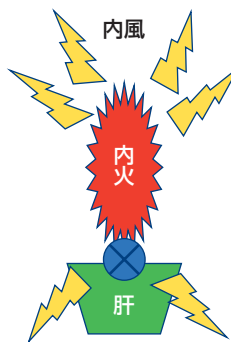
痒痒感と内風（図4）

十味敗毒湯は風湿に起因する皮膚の表層、化膿性病変の初期に用いることが大きなポイントである。すなわち十味敗毒湯の適応は、風湿という病邪の病態が中心のため、虚実では「実」の病態、寒熱では「熱」に傾いている病態に対応する処方である。

体内から出現する風を「内風」という。内風は気の過剰な流動であり、皮膚の痒痒感も内風から生じる症状の一つであることから、内風も考慮しながら対応することが重要である。

痒痒を伴う皮膚病変はⅠ型アレルギーに相当するが、その病態は大きく季節型・通年型、熱型・寒型に分けることができる。季節型・熱型は「邪実」が多い状態、通年型・寒型は「精気」の虚の状態で生じる内風ととらえることができる。

図4 内風



気の過剰流動。気の抑制を行う、陰・血の不足により生じる場合（陰虚生風、血虚生風）、熱に煽られ風を生じる場合（熱極生風）、気滞により鬱積した気が内動する場合（氣滞化風）がある。内風は肝気より生じる場合が多い。

【症状】めまい、振戦、痙攣、痒み、筋肉のスパズム、感情失禁、ジリジリした疼痛、電撃痛、体内のものの急激な流動が出現する。

十味敗毒湯の皮膚病変への活用

- 十味敗毒湯は、急性蕁麻疹で寒熱が極端ではない場合に用いる。十味敗毒湯は邪実を取り除く処方であり、精気の虚を補う処方ではないため急性の皮膚病変に用いる。
- 慢性疾患に用いる場合には、精気の虚を補う作用を有する処方（四物湯など）をベースに、さらに痒みがある・風湿が強い場合に十味敗毒湯を追加するとよい。
- 尋常性痤瘡の場合、若年者で急性に増悪している痤瘡であれば十味敗毒湯の単独処方でもよいが、成人期の慢性化している痤瘡には、その急性増悪期に用いるか、

他のベース薬に追加する。

- 慢性の皮膚炎症性疾患で、苔癬化あるいは色素沈着が強い(瘀血)場合には桂枝茯苓丸、痒みが強い場合や軽度の発赤がある場合には十味敗毒湯を併用するとよい。

現代医療における十味敗毒湯の臨床応用

● 症例1 38歳 女性、主訴：痒み(図5)

本症例は、苔癬化・色素沈着から「瘀血」があると考え、ベース薬として桂枝茯苓丸を選択した。しかし、急性増悪しており、温まると悪化するというように僅かに熱の傾向があるが冷えても良くないということでやや熱感の症状があること、浸出液は多くないため軽い風湿の傾向で痒みが中心の風邪の病変であることから、桂枝茯苓丸と十味敗毒湯を併用した。

● 症例2 42歳 女性、主訴：反復する蕁麻疹(図6)

本症例は、風湿熱でさらに背景の皮膚は陰虚である。陰虚があると「陰虚生風」となり「風」が過剰となって痒みが生じやすい、皮膚過敏性が上がると考えられる。そこで、消風散で陰を補い風・熱を除きながら、さらに風を除くために十味敗毒湯を併用した。

● 症例3 32歳 男性、主訴：熱感、倦怠感(図7)

本症例は、風熱湿の表証と弁証した。冬場であれば風寒に麻黄湯が適応するが、本症例のように梅雨の時期に気温が上昇すると夏風邪のパターン(風熱の邪)を呈するが、湿度が高いと熱が覆いかぶさり、寒気や節々の痛みが現れるような場合には風湿熱を除く十味敗毒湯が有効である。

十味敗毒湯の位置づけ

十味敗毒湯の位置づけは以下のとおりである。

- ①皮膚の表層の軽度発赤・化膿傾向のある湿疹病変(発赤・丘疹・小水疱・膿疱)に適応する。
- ②寒熱がはっきりしない蕁麻疹にも応用可能だが、慢性蕁麻疹に用いる場合には他の処方に加えて用いる。
- ③本処方の由来は急性感染症の初期の処方であり、寒熱がはっきりしないウイルス感染症にも使用可能である。
- ④慢性湿疹・蕁麻疹には背景病態を治療する処方と併用で、急性増悪部分や掻痒を改善する。

図5 症例1 38歳 女性

【主 訴】痒み

【現病歴】幼少期からアトピー性皮膚炎で加療されていた。ここ1年は黒く色素沈着を残して苔癬化している状態で、ここ2年間は桂枝茯苓丸(7.5g/日・分3)の内服で安定していた。3月下旬になって特に上肢・顔面部に痒痒感、発赤が出現した。

【現 症】皮膚は全体的に苔癬化して、やや黒色の色素沈着がある。淡い発赤が上肢および顔面部に出現し、特に晴れている日に痒痒感があり、掻破している部位は一部発赤した膨隆傾向となっているが、熱感まではない。滲出液は出ていない。体が温まると痒みが増すが、急に冷えても痒みを訴えていた。

【弁 証】風熱(湿)、瘀血

【処 方】桂枝茯苓丸(7.5g/日)+十味敗毒湯(6g/日)

【経 過】十味敗毒湯の併用3日後には痒痒感は改善し、約2週間の併用が有効であった。その後は減量し、約2ヵ月で急性増悪期を乗り越えることができた。

図6 症例2 42歳 女性

【主 訴】反復する蕁麻疹

【現病歴】約3年前から、夜間を中心に紅色から淡い紅色の膨隆疹が出現するようになった。抗ヒスタミン薬の内服で軽度改善したが、中止すると増悪する。さらに、抗ヒスタミン薬の内服に伴う眠気と倦怠感を感じるため、漢方薬での治療を希望された。消風散(7.5g/日)の内服で症状は軽快傾向だったが、4月に入って症状が増悪した。

【現 症】背景皮膚は乾燥傾向で、色素沈着はない。夜間に体が温まる、入浴で皮疹が増悪するというように、熱の傾向のある蕁麻疹である。発赤の色は強くない。熱感を伴うことはない。

【弁 証】風熱湿、陰虚

【処 方】消風散(7.5g/日)+十味敗毒湯(6.0g/日)

【経 過】十味敗毒湯の併用から痒みが消退傾向となり、症状は1回/週に1時間現れる程度になった。その後、6週間の内服でほぼ症状は軽快した。

図7 症例3 32歳 男性

【主 訴】熱感、倦怠感

【現病歴】6月下旬に連日雨が降っている時期に、軽度咽頭痛、熱感、体の重だるさ、節々の痛み、白色鼻汁が出現。

【弁 証】風熱湿の表証

【処 方】十味敗毒湯(6g/日)

【経 過】内服し寝ていたら軽度発汗し、体の痛みとだるさが軽快し、翌日夜には症状はほぼ消失した。